

---

## 第2章

# めざす都市像

---

# 01 高槻市の歩み

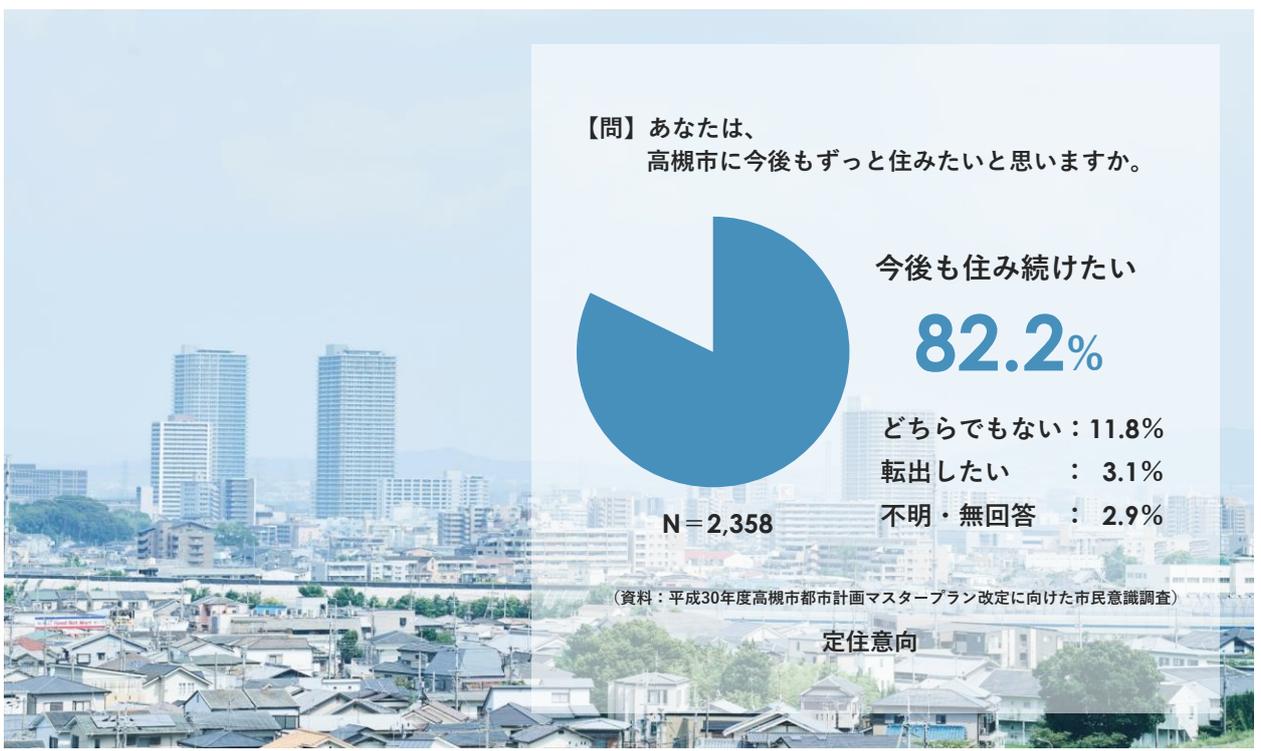
本市は、淀川水系でもいち早く米作りがはじまった弥生時代の代表的な環濠集落である安満遺跡をはじめ、邪馬台国時代の安満宮山古墳から、真の継体天皇陵といわれる史跡今城塚古墳、中臣（藤原）鎌足墓とされる阿武山古墳にいたる三島古墳群など多くの歴史資産が存在し、古くから人々の暮らしが営まれ、長きにわたって安定した勢力を保ち続けてきた地域とされます。

戦国時代には、芥川山城に拠った三好長慶が天下に号令し、一時、畿内の政治的中心地がこの地に移ったほか、キリシタン大名の高山右近によって高槻城を中心とする城下町が形成されました。江戸時代になると、高槻城は徳川幕府の重要拠点にふさわしい近世城郭に生まれ変わり、城下町は繁栄しました。また、芥川宿は街道の宿駅として整備され、富田は酒造りを中心とした商工業の町へ大きく発展しました。

その後、明治から昭和にかけての町村合併を経て、昭和18（1943）年に大阪府内で9番目の市となる高槻市が誕生し、工場誘致や市営バスの開業など、田園風景の広がるのどかなまちから、市勢発展に向けた近代化への歩みを進めました。

そして、昭和30年代にはいと成長の時代を迎え、市制施行以降も更なる合併を重ねて現在の市域を整えたほか、国鉄高槻駅に快速電車が停車するなど、交通利便性が高まりました。さらに、近代工場の進出で産業化が進展するとともに住宅建設が活発化するなど、全国でも有数の人口急増期を経験し、大阪・京都間の住宅都市としての色彩を強めました。その後、下水道等の都市基盤\*や公共施設の整備が進むとともに、商業施設や医療施設、大学等の立地によって、都市機能の充実した都市へと発展を遂げてきました。

その成果は、市民意識調査（平成30（2018）年度）の結果にも表れ、多くの市民から「今後も住み続けたい」と評価をいただいたことから、魅力的な都市づくりが進められてきたといえます。





## 市制施行以降の主なできごと

- 昭和 18 (1943) 年 高槻市が誕生 (大阪府内 9 番目の市)  
市営水道発足
- 昭和 25 (1950) 年 市営葬儀開始 (全国初)
- 昭和 28 (1953) 年 人口 5 万人突破
- 昭和 29 (1954) 年 市営バス 13 両で運行開始
- 昭和 32 (1957) 年 国鉄高槻駅に東海道本線快速電車停車
- 昭和 38 (1963) 年 人口 10 万人突破  
名神高速道路開通 (栗東～尼崎)
- 昭和 39 (1964) 年 市民会館完成
- 昭和 44 (1969) 年 人口 20 万人突破
- 昭和 45 (1970) 年 市役所庁舎 (現本館) 完成
- 昭和 48 (1973) 年 人口 30 万人突破
- 昭和 54 (1979) 年 国鉄高槻駅前地区市街地再開発事業完了
- 昭和 59 (1984) 年 総合体育館開館
- 昭和 60 (1985) 年 人口 35 万人突破  
大阪府三島救命救急センター開設
- 昭和 61 (1986) 年 陸上競技場完成・総合スポーツセンター開館
- 平成 5 (1993) 年 総合センター完成
- 平成 6 (1994) 年 阪急京都線連続立体交差事業完了
- 平成 10 (1998) 年 萩谷総合公園開園
- 平成 15 (2003) 年 中核市に移行 (大阪府内 2 番目)
- 平成 16 (2004) 年 JR 高槻駅北地区市街地再開発事業完了
- 平成 18 (2006) 年 阪急上牧駅北特定土地区画整理事業完了
- 平成 19 (2007) 年 子育て総合支援センター開館
- 平成 22 (2010) 年 古曽部防災公園開園
- 平成 23 (2011) 年 史跡公園「いましろ 大王の杜」完成
- 平成 24 (2012) 年 JR 高槻駅北東地区「MUSE たかつき」まちびらき
- 平成 28 (2016) 年 JR 高槻駅新ホーム・新西口改札の供用開始
- 平成 29 (2017) 年 新名神高速道路高槻 JCT・IC の供用開始
- 平成 31 (2019) 年 安満遺跡公園一次開園  
高槻子ども未来館開館  
エネルギーセンター第三工場稼働
- 令和 3 (2021) 年 安満遺跡公園全面開園



市営バス開業式



国鉄高槻駅前地区市街地再開発事業



阪急京都線連続立体交差事業



JR 高槻駅北地区市街地再開発事業



JR 高槻駅北東地区「MUSE たかつき」

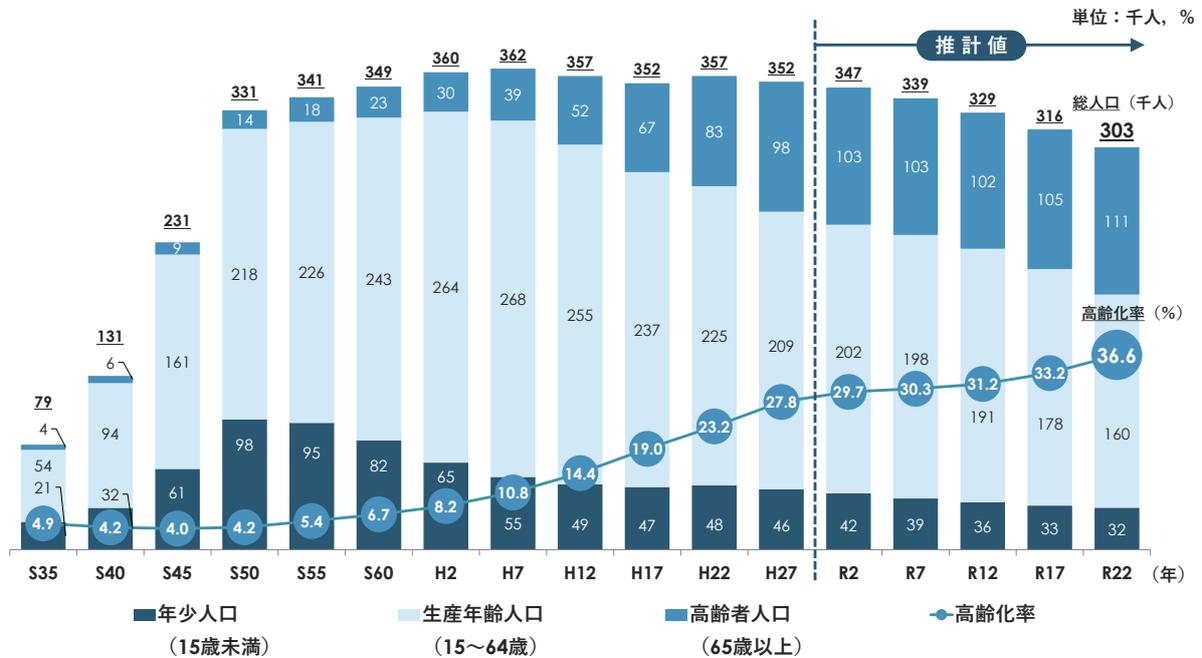


高槻JCT・IC開通式典

## 01 高槻市の歩み

時代の移り変わりとともに、本市を取り巻く社会環境も大きく変化しています。

本市の人口は、平成7（1995）年の約36万人をピークに緩やかな減少傾向となっており、20年後の令和22（2040）年には約30万人に減少、65歳以上の高齢者人口は総人口の4割近くまで増加すると推計されるなど、人口減少と少子高齢化の進行が予想されます。



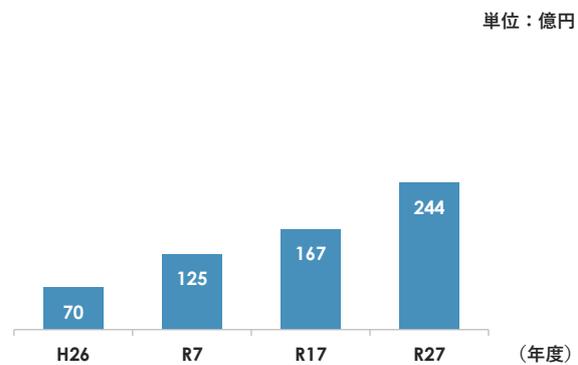
(資料：第6次高槻市総合計画より一部抜粋)

### 人口推移・将来人口推計

また、人口減少と少子高齢化の進行による影響は多方面に及ぶことが懸念され、財政面においては税収の減少や福祉に関する費用である扶助費の増加が見込まれるなど、厳しい行財政運営となることが予想されます。このほか、ライフスタイルの多様化や災害の激甚化を契機とした安全・安心に関する市民意識の高まりなど、都市づくりに対する市民ニーズにも変化が見られます。



(資料：「高槻市みらいのための経営革新」に向けた改革方針)



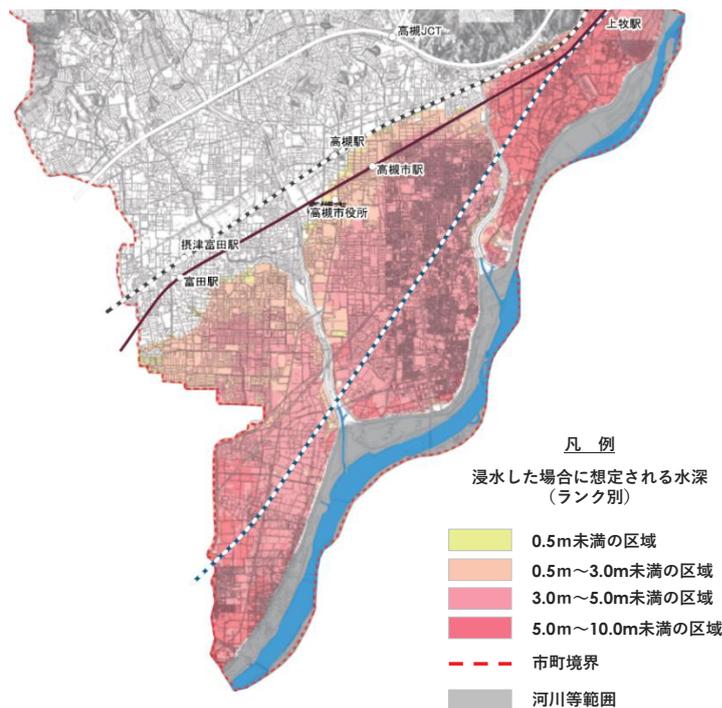
(資料：「高槻市みらいのための経営革新」に向けた改革方針)

### 市税の見通し

### 繰出金の見通し

繰出金：介護保険特別会計及び後期高齢者医療特別会計への繰出金

## 01 高槻市の歩み



(資料：平成29年度淀川洪水浸水想定区域(国土交通省))

淀川洪水浸水想定区域(想定最大規模降雨\*)



(資料：高槻市)

大阪府北部地震による建物被害



(資料：高槻市)

平成30年台風第21号による倒木

このような社会環境の変化を踏まえ、成長社会において量的拡大を追求してきた都市づくりに対し、今後、財政的な制約が高まる中でも、都市の成長によって得た物質的豊かさを維持しつつ、精神的豊かさや生活の質の向上を重視する成熟社会に対応した都市づくりを進めていくことが求められます。

この都市計画マスタープランでは、そうした成熟社会における都市づくりの考え方にに基づき、先人によって築かれてきた都市としての長を次世代に引き継ぐとともに、市民・事業者・行政の多様な主体による協働のもと、人口減少下においても都市の活力を衰退させない都市づくりに取り組んでいく視点から、めざす都市像を示します。

## 参考データ

このほか、本市を取り巻く社会環境の変化に関連する主なデータについては、

参考資料 01 都市の現状と動向 66～68 ページ に掲載しています。

## 02 基本理念

本市が歩んできた特色ある都市の変遷や社会環境の変化を踏まえ、今後めざすべき都市づくりの全体像として、次の基本理念を掲げます。

この基本理念に基づき、市民をはじめとする本市に関わる全ての人たちとともに、共通の価値観を持った都市づくりを進めていきます。

住みたい・住み続けたい・訪れたい都市 <sup>まち</sup> たかつき

～ 対流を生み出す持続可能な都市 <sup>まち</sup> をめざして ～



人口減少をはじめとする厳しい社会環境の変化の中でも、  
交通利便性の高さや充実した都市機能、歴史・文化などの豊富な地域資源を強みに、  
本市に暮らす人、訪れる人が都市の様々な場面で出会い、交わることで、  
双方向の活発な動きである対流を生み出し、  
市内外の人々から“住みたい・住み続けたい・訪れたい”と思われる持続可能な都市を創ります。



# 03 ありたい姿

基本理念に基づき、次の3つのありたい姿を掲げます。

その実現に向けた取組を進めることで、本市が“住みたい・住み続けたい・訪れたい”と思われる持続可能な都市をめざします。

## 1 誰もが住みやすさを実感できる快適な都市<sup>まち</sup>



様々な場所に暮らす多様な市民が、移動等の制約がなく、買い物や医療・福祉等の生活サービスを受できるとともに、人口減少や少子高齢社会に対応した質の高い空間を形成することで、誰もが快適に暮らせる都市を創ります。

## 2 にぎわいと活力を実感できる魅力あふれる都市<sup>まち</sup>



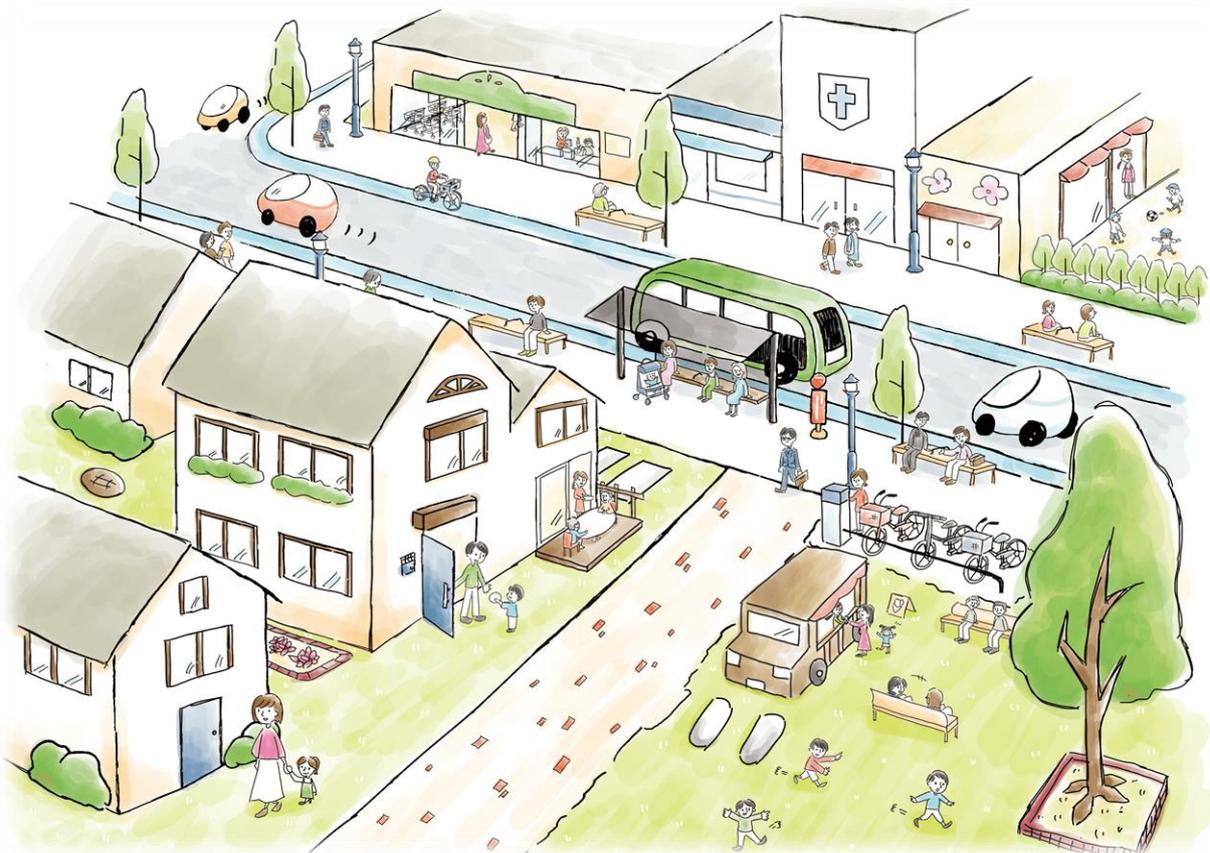
本市が有する豊富な地域資源やこれまでに整備されてきた都市基盤等の良質なストックを強みとし、それらを守り、活用することで、時代に応じた新たな価値を生み出すとともに、にぎわいと活力のある魅力にあふれた都市を創ります。

## 3 安全・安心を実感できる強靱な都市<sup>まち</sup>



大規模な災害の発生時にも、被害を拡大させない都市を形成するとともに、日常の安全・安心な暮らしを守る防犯対策など、都市に内在する様々なリスクの共通認識や連携の輪が構築された安全・安心で強靱な都市を創ります。

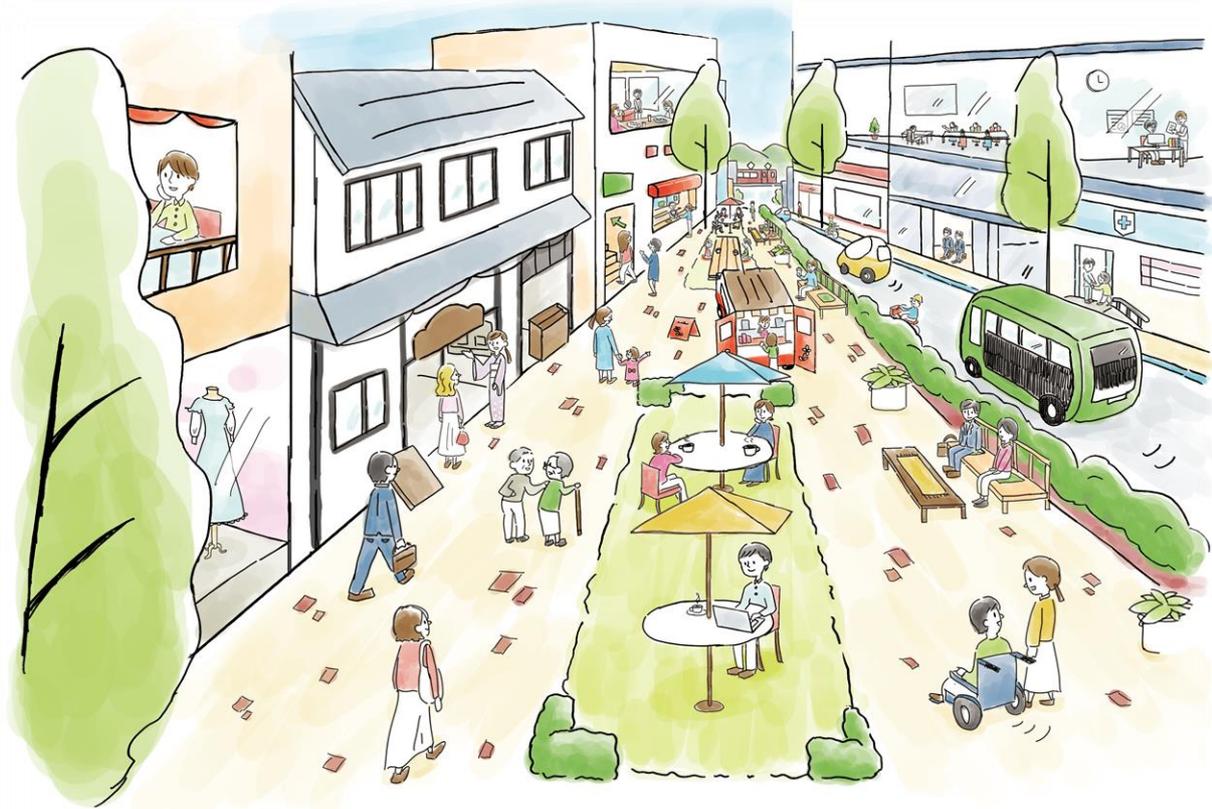
# 1 誰もが住みやすさを実感できる快適な都市<sup>まち</sup>



## 具体イメージ

- ✓ みどり\*と調和した住宅が建ち並び、ゆとりとうるおいのある住環境が形成されている
- ✓ 徒歩生活圏にスーパーマーケットや保育園などが立地し、日常的な生活サービスが確保され、快適な生活を送ることができる
- ✓ バスをはじめ、ICT\*等を活用した新たな交通サービスなど、持続可能な交通体系が構築され、マイカーに頼らず便利に移動できる
- ✓ 自転車走行空間やバリアフリー\*化された歩行空間などが整備され、誰もが安全・安心に通行できる
- ✓ 空地等のオープンスペース\*には、ベンチや休憩施設が設置されており、子どもから高齢者まで、幅広い世代の憩いや交流の場となっている

## 2 にぎわいと活力を実感できる魅力あふれる都市<sup>まち</sup>



### 具体イメージ

- ✓ 商業・文教・交流など、多様な都市機能が集積する拠点性の高い空間形成が図られ、市内だけでなく、市外からも多くの人々が訪れている
- ✓ 道路、公園等の公共空間や民有空間が一体となって、都市のにぎわいを生み出す交流や活動の場として有効活用されている
- ✓ 鉄道駅周辺は、バスやタクシーなど公共交通の通行が優先されるとともに、人を中心とした道路空間への再構築が進んでいる
- ✓ 歩行者にとって居心地が良く、回遊性が高い空間が形成されており、子ども連れや高齢者、外国人など多様な人々が行き交い、にぎわっている
- ✓ 都市の魅力向上の要素として景観・歴史等の地域資源が有効活用されるとともに、次世代への継承が図られている

### 3 安全・安心を実感できる強靱な都市<sup>まち</sup>



#### 具体イメージ

- ✓ 激甚化する災害の発生に備え、施設の耐震化や河川の護岸整備をはじめ、都市における防災機能の強化が図られ、災害に強い都市空間が形成されている
- ✓ 住民一人一人が、平時よりハザードマップ等を活用し、災害リスクや避難行動について把握するとともに、地域防災力の向上を図る防災活動に積極的に取り組まれているなど、有事においても安全かつ迅速な行動がとれる
- ✓ 水源かん養\*や防災など、多面的機能を有する森林や農地が適切に保全され、都市と自然が共存した都市空間が形成されている
- ✓ 交通安全対策や防犯対策が実施されるとともに、日常においても共助の意識が深く浸透し、安全・安心な生活を送ることができる

## 04 ありたい姿の実現に向けて

ありたい姿の実現に向けては、数ある課題の中から重点的に取り組むべき課題（以下「重点課題」といいます。）を設定し、戦略的な都市づくりを実践していくことが重要となります。

そのため、本市の特長や社会環境の変化等を踏まえた上で、成熟社会における都市づくりの考え方に重点を置き、次の視点から設定した重点課題を5つ掲げます。

### 重点課題設定の視点

- ✓ 本市がこれまでに築き上げてきた都市としての特長を維持・活用すること
- ✓ 今後起こりうる都市への脅威に備え、想定外の事態を回避すること

### 1 誰もが移動しやすい交通体系の構築

公共交通をはじめとする交通利便性の維持を図るとともに、誰もが移動しやすい持続可能な交通体系の構築に取り組みます。

本市は、大阪・京都間を結ぶJR東海道本線と阪急京都線が市域を東西に横断し、JR高槻駅と阪急高槻市駅には新快速や特急などが停車します。また、それらの鉄道駅を中心に市営バスが放射状に運行するなど、利便性の高い公共交通網が形成されています。

しかし、今後は人口減少や少子高齢化が進行することで、公共交通利用者数が減少し、赤字路線の廃止や減便など、公共交通のサービスレベルの低下が懸念されます。また、サービスレベルの低下により、十分な利便性が確保されない状況となれば、自家用車への過度な依存や地域住民の外出機会の喪失を招くなど、公共交通利用者数の更なる減少を引き起こす悪循環に陥ることも想定されます。

### 2 都市機能が充足した高質な住環境の形成

都市の密度を低下させないコンパクトな都市づくりとともに、徒歩生活圏においても都市機能が充足した高質な住環境の形成に取り組みます。

本市は、鉄道やバスなど交通利便性の高さを強みに、鉄道沿線や郊外の丘陵地等への住宅開発が進められ、大阪・京都間の住宅都市として発展し、高い人口密度が維持された良好な住環境が形成されています。

しかし、近年は核家族世帯や高齢者単身世帯が増加するなど、家族形態に変化が見られ、全国平均よりは少ないものの空家等が増加傾向にあることから、都市の密度が低下する都市のスポンジ化\*が懸念されます。また、都市のスポンジ化が進行することで、商業や医療などの生活サービスが維持できず、利便性が低下したり、老朽化した空家等が放置されて、治安や景観の悪化など様々な問題を引き起こし、市街地が衰退していくことも想定されます。

### 3 景観・歴史等の地域資源の継承と更なる活用

貴重な地域資源を再確認するとともに、守り、育みながら次世代に継承し、魅力や活力を生むための資源活用に取り組みます。

本市は、北摂山地に連なる山並み、農地・里山、淀川・芥川などの自然環境が都市と共存する形で分布するほか、城下町や寺内町など歴史の面影を残すまちなみをはじめ、古墳や遺跡等の歴史・文化資産が多く存在し、本市の貴重な地域資源として地域や住民の手によって守られています。

しかし、今後は人口減少や少子高齢化の進行により、そうした地域の担い手が不足することで、十分に管理されない農地の発生や歴史的な趣きをもつ町家等の消失など、長く受け継がれてきた貴重な地域資源が失われ、地域の魅力や活力の低下につながることを懸念されます。

### 4 地域特性をいかした都市拠点の形成

人口減少や少子高齢化の進行に対抗するため、都市活力の維持・向上を図り、交流人口\*の拡大や都市の回遊性の向上など、地域特性をいかした都市拠点の形成に取り組みます。

本市は、平成18(2006)年3月に策定した都市計画マスタープランから「集約型の都市づくり」を掲げ、無秩序な市街地の拡散を抑制するとともに、高槻駅周辺と富田駅周辺を中心に都市機能の集積や高度化が図られるなど、コンパクトシティがおおむね形成されている状況にあります。

しかし、本市は高度経済成長期の昭和30～40年代にかけて、全国的にもまれにみる人口急増期を経験しており、今後、少子高齢化の進行が予想される中、将来的な都市活力の低下が懸念されます。

### 5 度重なる災害の経験をいかした防災力の向上

度重なる災害の経験をいかし、市民と行政の協力体制の構築を図るとともに、災害に強い都市づくりに取り組みます。

近年、全国的に地震・風水害等の大規模災害が多発しており、本市においても平成30(2018)年の大阪府北部地震や台風第21号等により、建物被害や倒木など、甚大な被害をもたらしました。

今後も、南海トラフ巨大地震や気候変動に伴う大規模な自然災害の発生が想定される中、厳しい財政状況においても、老朽化した施設の適切かつ計画的な施設管理を実施していかなければ、災害に対する都市の脆弱化を招くことが懸念されます。また、核家族世帯の増加と相まって高齢者単身世帯が増加するなど、家族形態の変化等を背景に近隣住民間のつながりが希薄化することで、災害時に重要な役割を果たす「共助」が機能せず、深刻な事態を招くことも懸念されます。

## 04 ありたい姿の実現に向けて

なお、前述の5つの重点課題について、それぞれの課題解決に単体で取り組むのでは、その効果が限定的なものとなってしまいます。

そのため、今後、本市が取り組むべき都市づくりの方向性を次のとおり整理し、総合的かつ一体的な取組を進めることで、相乗効果を生み出し、ありたい姿の実現をめざします。

### 都市づくりの方向性

## 対流を生み出す

## コンパクトシティ・プラス・ネットワークの推進

拠点や地域を有機的に結びつけ、  
都市と自然が共存したまとまりのある土地利用の基本構成を維持しつつ、  
それぞれの地域特性に応じた都市機能の集積や高度化を図るとともに、  
協働のまちづくりを推進することで、  
人口減少下においても、人等の動きを活発にする対流を生み出し、  
都市の活力を衰退させない持続可能な都市づくりに取り組みます。

### コンパクトシティ + ネットワーク

生活サービスと居住の場を近接させ、  
人口を集積したコンパクトな都市を形成



公共交通を中心とした地域間の連携や  
持続可能な公共交通ネットワークを構築

拠点への生活サービス等をはじめとした  
都市機能の集積や高度化を誘導

拠点

公共交通沿線等への居住の誘導

地域間を結ぶ  
公共交通サービスの充実

鉄道

拠点

#### 期待される効果（例）

生活利便性の維持・向上

密度の経済性

高齢者・女性の社会参画

外出機会の増加

住民の健康増進

地域経済の活性化

行政サービスの効率化

行政コストの削減

コミュニティの維持

農地・緑地の保全・活用

地球環境への負荷低減

災害リスクの低減

など

（資料：国土交通省資料より高槻市作成）

コンパクトシティ・プラス・ネットワークのイメージと期待される効果

## 都市における対流



### 対流とは？

本来、対流とは液体や気体の中に相反した方向の流れが起こる現象を指します。

身近な例として、やかんでお湯を沸かす場面をイメージしてください。「熱源」を与えることによって、やかん内の水に「温度の違い」が生じ、温まった水は上昇、まだ温まっていない水は、下降していきます。この一連の移動現象が対流であり、これによって内部の水は徐々に熱湯となっていきます。



やかんでお湯を沸かすときに起こる対流

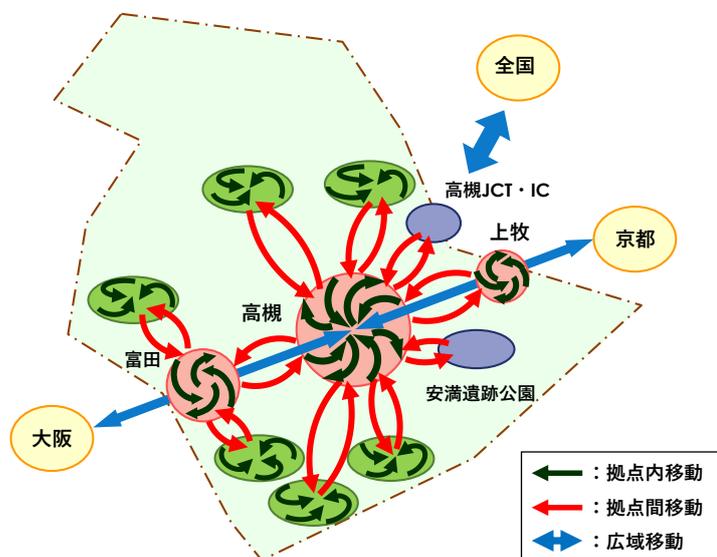
もともとは液体や気体における移動現象を指す対流という言葉ですが、都市計画マスタープランにおいては、対流を人等の活発な動きと捉え、持続可能な都市形成に向けて、都市に活力をもたらすためのキーワードとして整理します。

そして、都市における対流の発生には、本来の対流を発生させる「熱源」や「温度の違い」に当たる次の要素が必要であるとしています。

### 都市における対流の発生要素

- ✓ 拠点や地域の活力を支える、市民をはじめとした人々の活動等
- ✓ 市民をはじめとした人々の活動等によって生まれる、拠点や地域ごとの魅力や特色

これらによって、多様な個性を持つ地域間が、人・もの・情報などの双方向の活発な動きである対流を起こし、地域に活力をもたらすとともに、多様な個性の交流や連携、循環によって新たな価値が創出されます。



(資料：高槻市総合交通戦略)

対流のイメージ

第1章  
都市計画マスタープラン  
について

第2章  
めざす都市像

第3章  
全体構想

第4章  
地域別構想

第5章  
都市づくりの推進  
に向けて

参考資料